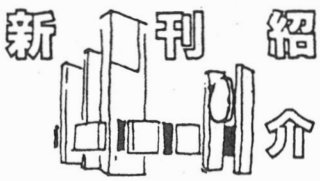
https://rodosoken.com/



全国労働組合総連合編

『全労連 20 年史 激動の時代を拓く闘いの軌跡』

藤田　実

全労連が「希望に輝く未来のために、いまともにたたかおう」というスローガンのもとに、たたかうナショナルセンターとして発足したのが1989年11月21日、それからちょうど20年目の2009年10月に『全労連20年史』が刊行された。『全労連20年史』というタイトルが示すように、本書は、全労連が結成以来、取り組んできた運動をまとめたものであるが、運動面の分析的記述にとどまらず、その時々の政治・経済・社会の動向が解説的に記述されているので、90年代の日本の政治・経済・社会の構造的変化のなかで、全労連が果たしてきた役割が浮かび上がってくる。

本書は、序章に「全労連前史」をおき、労働戦線の右翼的再編に抗しての統一労組懇の結成、それを母体とする全労連結成までの歴史を丹念にたどっている。これにより、全労連の結成にどのような議論があり、どのような困難があったのか、追体験できるのは、評者のように結成前後の詳細な議論を承知していない読者にとって、有益である。

第１章以下は、「人間らしく生き、働くために」、第２章「新機軸『総対話と共同』を追求」、第３章「『構造改革』路線と対決、そして反転攻勢へ」と題する本論が展開され、全労連20年の闘いの軌跡が、加盟単産・地方組織のトピックスを交えて、簡潔にまとめられている。

また補説では、「全労連が継承発展をめざす『たたかいの伝統』」の章では、戦前・戦後の労働運動の歴史が要を得て簡明にまとめられており、これだけでも「日本の労働運動史」のテキストとして使用できるほどの内容となっている。さらに全労連関係、他の労働関係、国内外の動きと分けて記述されている詳細な年表を追うだけでも、内外の政治･経済情勢の変化のなかで、全労連や日本の労働者がどのようなたたかいを展開してきたのか、理解することができる。

本書は「よみものとしての年史」をめざしたと「編纂を終えて」に書かれているとおり、読み物としても読みやすいし、おもしろく読める内容となっている。また政治・経済・社会の動きを広範に取り上げながら、全労連の闘いを記述しているので、単なる全労連の立場から見た労働運動史というだけでなく社会運動史的内容をもっている。それだけに、索引があれば、より有効な活用ができるのではないかと惜しまれる。

全労連結成20年の歴史、とくにその後半の10年間は全労連のたたかいにもかかわらず日本の経済社会では格差拡大と貧困化が進んだ10年でもある。それだけに、本書を読むと、全労連がもし結成されていなければ、日本の労働者階級はより抵抗が困難な状態に置かれていたのでないかという思いがする。しかし2008年９月の金融危機に端を発した経済危機により、日本全体を将来不安が覆い、就職難の若者は自分の将来に確たる見通しを持てなくなっている現在、全労連は求められている役割に比べ、組織拡大では多くの課題を残しているように思われる。この『全労連20年史』の刊行を機に、新たなたたかいの伝統を創り出して欲しいと切に思う。

(2009年10月・大月書店・3500円)

(ふじた　みのる・常任理事・桜美林大学教授)